東京清陵会だより

女性同窓生座談会

〜清陵出てからン十年 今じゃ……

実社会に出てわかった、野蛮な校風と自治の風土

内田 今日はどうもありがとうございます。清陵では女性は少数派で、たまには少数派の声も紹介しよう、というのが編集委員の意向のようですが、今年は私たち六四回生が当番幹事ということで、司会のお鉢が回ってきました。なぜ二葉じゃなく清陵に入ったのか、という辺から始まって、清陵時代って何だったのか、というようなことを話し合えたらと思います。

長田 私は豊平の出身なんですが、一学年二クラスで清陵に行くのは毎年四、五人、女子は私一人でしたから、結構周りの抵抗もあって、嫌がらせの手紙が来たこともありました。「清陵に行けばパン助になるぞ……」とか。

私は将来どうしても理系のことをやりたかったんですね。だったらやっぱり清陵かなあと思って。

守矢 私はハッキリした理由はよく覚えてませんね。あの年、同じ宮川中学から女子が三人入ったんですが、中学は男女共学ですから、共学の楽しさというか、女子校というのは考えても見なかった。清陵も共学であるというイメージしかありません。入学してから、女子がこんなに少ないのか、とは思いましたが。

長田 私たちの時代から、小学一年生から男女共学になったんです。ですから私自身も男だ女だという意識はあまりなくて、中学時代とあまり変わらなかったですね。男の子が多いのは覚悟してましたから。

内田 私には五歳上の兄がいて清陵に通ってたんですが、食卓の話題に清陵の話が出るんですね。木造の校舎の廊下を朴歯の下駄でガタガタ歩くとか、寒いと机を壊してストーブで燃やすとか、極めて非日常的で面白い話をしてくれる。この世にはひどく野蛮な世界があるらしい、一度そういう所に行ってみたいもんだ、と（笑）。

宮坂さんは私のちょうど十年下になるんですが、どうですか？

宮坂 清陵を選んだのに、立派な理由は何にもないんですね。たまたま姉が行ってて結構楽しそうだなと思ったのと、自分も受けて受からなくもないかなと思って、じゃ清陵でもいいかな、というだけで。ですから入る時も入ってからも、違和感みたいなのはあんまり感じなくて、ごく自然に普通のレールの上を走ったというか、いい加減といえばすごくいい加減な人生をやっちゃってますけど（笑）。

長田 ただ、少数派ですから、女性はやっぱりかたまるんですよ。私たちの年代が九人……。

宮坂 私たちも九人です。

内田 私たちは十人でした。守矢さんの時は？

守矢 十一人です。

長田 お昼の時なんか困ったですね。パンを売っていて……。

守矢 それを持って主事室みたいなところに行きましたね。

長田 私はそれほどでもなかったんですが、もう一人の人はかなり居づらかったって言うんですよ。その人は前の方の席だったんで、常に視線を感じるとか言ってましたね。

宮坂 男の人から見ると、女は要するに異分子って感じがあったみたいですよね。

内田 体育ではありませんでした？私たちの時は夏はテニスで冬は卓球。

守矢 軟式テニスと卓球のみですね。

長田 正規の体育の授業ってやったことがないですね。でも私たちのころ、すでに受験競争は始まってましたね。一学年二八〇人くらいいたんですが、テストの度にすごい下の方、二〇〇番くらいまで発表するんです。あれは厭だったですね（笑）。

守矢 期末テストでも、科目ごとに十番くらいまで貼り出されて。全体のは五十番まで、一階の職員室の前の壁に貼り出されて。

宮坂 私たちの頃も、上位五十番くらいまで貼り出されてました。

守矢 もう厭でしたね、あれは（笑）。

内田 私はおよそ興味がなくて全然覚えてない（笑）。覚えてるのはバンカラな校風というか、コンパとか、知的

出席者
長田宏子（六二回）
守矢早苗（六七回）
宮坂淳子（七四回）
司会
内田良子（六四回）

第 8 号
編集・発行
東京清陵会
（諏訪清陵高等学校同窓会東京支部）
事務局
〒270-11
我孫子市白山2-15-2
林 尚孝方
TEL 0471-83-2726

1997年度 東京清陵会定期総会案内

日時 平成9年10月9日（木） 午後6時（受付開始午後5時）
場所 虎ノ門パストラル（新館1階鳳凰の間）
港区虎ノ門4-1-1（03-3432-7261）
（地下鉄日比谷線神谷町駅4b出口下車2分
または地下鉄銀座線虎ノ門駅下車8分）
議事 (1) 1996年度会務・決算報告
(2) 1997年度事業計画・予算案
(3) その他

懇親会 **会費 8000円**
ただし現役の学生は半額.
なお，当日はアトラクションとして小池共平氏他による諏訪大社上社木遣り，またロビー展示等を用意しております.
当番幹事＝64回生，次期当番65回生，サブ幹事74・84回生
ご面倒ですが出席・欠席いずれの場合でも同封の返信用ハガキに御記入の上，**9月20日**必着でご返送下さい.

で素敵な、規格にはまらない人が一杯いてすごく楽しかった、ということですね。コンパではお酒も出てましたし。

守矢　あの頃バケツでジャガイモを茹でてカレーを作った思い出があるんです。バケツでですよ。どういうわけかカレーでしたね。

長田　そうそう。

内田　わらじが入ってたり(笑)。野蛮といえば野蛮な校風でしたね。

宮坂　お話聞いてると、私のときは、そういった野蛮なものはあるにはあっても、こちらが女子だったせいか、多少の距離があった感じですね。男の子は男の子同士の世界があったんでしょうけど、だいぶ世代が違うというか、私の時代は違ってるのかなあって思いますね。

内田　授業によって教室が変わりましたよね。どの授業にも、ゴタする人がいるわけですよ。私は、今日は誰が何をやるだろうとワクワクして(笑)。もういつもお弁当持って物見遊山ですからね(笑)。私はもう観客という感じで、本当に楽しかった(笑)。

宮坂　自由な校風で、ウシマサ(牛山正雄先生)の授業とか、楽しかった記憶がありますね。

内田　数学の時間に、カバンと何かに学生服着せて廊下の下の窓からエスケープしていっちゃう人がいたんですよ(笑)。先生も心得てて、彼を指すわけ、そうすると代返した友人がいてね、その人がちゃんと黒板に行って問題を解いて、説明までしたあとで、「お前ちょっと顔見せろ」(笑)。そういうことが毎日のようにあった感じで、すごく楽しかった。

守矢　それはすごく素敵ですね。そういう教師陣とそういう生徒とね。

宮坂　私たちの頃は、授業をサボるとかっていうのはわりと平気にできたし、わりとしてる人はいましたけど、女の子は皆結構真面目だったような気がするんです。

六〇年安保と自治の校風

長田　私もそういう野蛮というか自由な校風が、単なる野蛮じゃないということを、後になって感じましたね。

守矢　入学してまずびっくりしたのは、校歌の説明を、先生じゃなくて上級生がやったこと、それから談論会ですよね、新聞研なんかも非常に談論風発で、本当に自治的な高校だと思ったことが、すごく印象に残っています。

長田　私たちが入学した昭和三十一年から、いわゆる七十五分授業というのが始まったんです。これも生徒主導で始めたわけですね。それで、入学したときにはまだカリキュラムが出来てなかった、入学早々、一週間それこそ毎日毎日、学友会の総会ですよ、放課後。総会で決めなきゃいけないという

長田宏子さん（62回）

内田　豪傑のような人はいなかったんですか。

宮坂　今だったらすぐ校則でどうのこうの言われそうな人はいましたね。でも、学生運動がちょうど下火になっていった時代だったせいか、皆さんの時代よりは少ないかも知れない。その辺の世代的な落差が相当あるのかなって、今になると思いますよね。

長田　そう思いますよね。あのとき中心になってやってた人たちはこうだったのかなあとか、何となく分かるような気もするんですよ。

宮坂　もう一つ不思議なのは、勉強ができるとかできないとかで言うと、もう自分はできないんだって威張れるようなところがありますでしょう。そういう雰囲気はすごく良かったなあと思うんですよね。今だったら多分、できない子は切り捨てられちゃうんじゃないですか。それがなくて、自分は勉強はできないんだ、でも得意分野としてこういうことがある。たとえば面白い人間なんだということは周りもすごく認めてくれる、そういった関係はすごく良いものだなあと思うんですよ。

内田　宮坂さんの頃もそうだったんですか。私たちの時は当然そうで、だから自分で秀才コースを選ぶか、能ある鷹は爪を隠す方へ行くか、考えなきゃならなかったんですが。

宮坂　それはそうでしたね。だから今でも、そういう同窓生とかいったつながりが懐かしくなるのかな、という気がします。

守矢　私なんかウシマサ先生の地学研究室にしょっちゅう入りびたってた人間ですけど、地学研究室に入ってくる人たちみんな、ある種議論吹っかけ合ったりしてましたね。もちろん先生に対する尊敬の気持はちゃんとあって、ときどき先生が大きな部分はキチンと押さえてくださる。だけど普通は、「お前たち、そういうことは自分で考えてやらなくちゃいけない。自分で考えるようにやり方でしたね。

守矢早苗さん（67回）

宮坂　社会に出てみると、自治っていうのは本当にそう感じますよね。自分たちで考えるように仕向けて下さるようなやり方でしたね。

内田　当時の社会科の先生達でつくった副読本で緑の本があったの覚えてます？

長田　今でも持ってますよ。

内田　私はあれがすごく新鮮でね、清陵で一番印象に残ってるのは、あの副読本なんですよ。現代史を通史として書いてあって、分かりやすくて面白かったですね。私はあれで歴史が好きになった。それで学生運動も好きになった(笑)。私たちのときは、三年の年がちょうど六〇年安保だったんですよね。安保条約が国会で通る前ぐらいから、朝、学校に行くと皆な教室に行かないで体育館に行って、如何に意思表示するかずっと話しあいました。夕方も延々と議論をして、帰りの汽車がなくなる遠い人から帰って行くっていう感じで、随分遅くまで話し合ってましたねえ。それで学友会の総会で決議して、高校生が初めて学友会としてデモをしようということになったんです。

みんなで校庭に出てこれから始めようという時に、先生方も出てきて、とにかく暴走されたら困ると思われたんでしょうね、校長はじめ先生方が先頭に立つから、君たちは自重してやって欲しい、その代わりデモをするのは認めよう、ということになりました。

守矢　結局それの名残りですね。私が入学したのは六一年ですから、上級生ですごい気合入れて政治的なアジをやってる人がいたんです。その前の年

の秋、中学三年のときに、校長室のテレビで浅沼さんが刺し殺される場面を見たんです。ものすごいショックでした。その翌年の入学でしょう。ですから、清陵というところがそういう、自分たちで何でも考えて自己表現をする場である、ということをすごく感じましたね。自分は何も言えませんでしたけど。

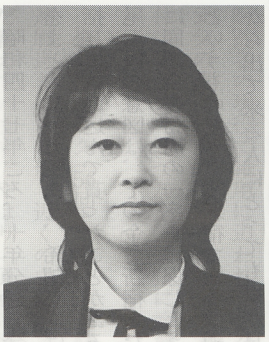
内田 私はその後、六一年に東京女子大に入ったんです。その頃大学は、「挫折ムード」が色濃く漂っていました。学生運動を過激にやったために学友会が解散させられていまして、入ったらすぐ学友会の再建運動でした。

入学と同時に寮に入ったんですが、その頃、東西二つの寮があってね、西寮に入ると勉強する、東寮に入ると学生運動する伝統があったんですが、私は東寮に入っちゃったんですよ。たまたま私たちの寮は個室なんですが、入って一カ月くらい、先輩が毎日のようにオルグに来るわけですね。清陵の先輩はいなかったんだけど、長野県の先輩はいて、ブントとか新左翼の系統で。「清陵から来て学生運動しないのはモグリだ」なんて言われて（笑）。

学生運動やりたいから女子大に来たという人がいるわけですよ。女子大だと女性がリーダーになれるから、という理由で（笑）。ですから、私は清陵時代に薫陶受けてそのまま素直に学生運動に入ったんですが、やっぱりなんか長野県の人脈ってありますよね。

守矢 あります、ありますよ。

長田 六〇年安保は私は大学生で、樺美智子さんが亡くなった日、国会の中にいましたけど、貧乏学生でしたからアルバイトをあれこれやって、最後の年は朝日新聞に入りびたりみたいな感じでしたね。


宮坂淳子さん（74回）

守矢 でも、大学に入った時は、高校時代そういうの全然知りませんでしたから、学生運動ってものすごく新鮮だった。とにかくどっかに行くとみんなでインターナショナル歌うような時代でしたから。

内田 そうでしたよね。

守矢 「ともしび」に行っても、そんな歌が出て来たりして。私はどういうわけか、横浜市立大学という、かなり代々木系の強い学校に入りまして、のちに『青春の墓標』を書いた奥浩平さんがヘルメット被って構内を走り回ってるような時代でした。昭和三十九年、一九六四年ですね。

大学では私も女子寮に入って、自治寮ですからそういう色がかかったんでしょうかね。いつの間にか「赤旗」を取ってたもんですから、母に「お前も赤くなってる」とか言われまして（笑）。もっとも二年になったら、新鮮味がなくなって、一切やめましたけど。

大学一年の時、清陵祭に来たんですよ。そしたら新聞研とか社会部とか、部活でかなりイデオロギー的なことをやってるんですね。ああ、ここの部活でこんなことやってたんで、大学の雰囲気にすっと入ったんだな、と思いましたね。大学そのものは、少人数で先生たちと話ができるという点で、清陵の地学研究室の雰囲気と同じものを感じました。

内田良子さん（64回）

清陵が培った"一匹狼"精神

長田 私なんかはその時、勤務先の高校で生徒会が職員室を占拠したんです。封鎖はすぐに自主的に解いたんですけど、その後、毎日ホームルームをやるようになって、一カ月ぐらい続いた。そこで生徒から問い糾されるわけですね。卒業式は何のためにするのか、とか、内申書の問題とか。

若い先生なんか、かなり辞めて行く人もいたんですよ、あの頃。ですが、高校時代のあの自治みたいなものもあったし、大学時代にある程度知ってましたから、自分としてはわりとうまく対応できたんですよね。高校時代、中心になってやってくださった先輩たちのことを思ったから、対処できたような気がするんですよ。

内田 そうですねえ。

内田 宮坂さんの時は、学生運動的なものはなくなってたわけですか。

宮坂 七〇年安保の年が高校三年でしたが、もうなくなってました。でも、かといって今のような受験戦争ではなかったんですね。大学へ入ってから諏訪に帰ったら、予備校というか塾がいっぱいできてたんで驚いたぐらい。

内田 卒業式でヘルメット被った生徒が演壇を占領したという事件は、その頃じゃなかったですか？

宮坂 たしか私たちの年の卒業式にあったような気がするんですよ。私も出たはずなんですが、よく覚えてませんね（笑）。

長田 しかし、学生時代は男女の差というのは感じなかったんですが、やっぱりまだあったんですね、就職するときに。一般会社は女性は自宅か親戚から通える人じゃないとダメ。教師しかまともに雇ってくれるとこなかったんです。今じゃ考えられないんですが。

内田 私のときはいわゆる四〇年不況で、男子ですら就職が厳しい。そもそも四年制大学出、まして女子大出といえば、皆さん家へ戻って花嫁修業して結婚するっていう時代でした。聞いた話ですけど、東大出て東レに就職した人と結婚するのが玉の輿という時代だったんです。

私も、今でこそカウンセラーを名乗ってそれなりにやってますが、心理を出て、ほとんど仕事なかったですよね。だから今まで組織にちゃんと身分保障された就職って一度もしたことないんです。五十五歳の今まで全部フリーター、年間契約とかいう形で資格もなしにやって来ました。清陵でも女性というのは枠の外にいて、一匹狼みたいなとこあったじゃないですか。だから組織の外で一人でやるっていうの、経験的に身についていたから、あまり気にならないですね。

宮坂 私、去年から失業して、今は派遣でいろんな会社に行きますよね。私もいわゆる大きい会社に入ったことないから、組織というのが分かんなかったんですよ。今回あちこち行ってみて、初めて分かった感じですけど、結局、大きな会社の人たちというのは、組織としての仕事、マニュアルに沿ったやり方はたしかに出来るんですけど、マニュアルから外れたことになると、いくら急を要することでもう融通がきかないんですね。だから、大きな組織というのはやっぱり特殊な世界なんだな、と思って（笑）。

内田 私は、どっちみち辞めさせられる身分なら、辞めてくれ、といわれるようなやめ甲斐のある仕事をしよう、自分のやりたいことを試して、肥やしを全部もらって来よう、という気持でやってきました。これは、先程から話に出ている清陵の自由な校風、自治的な校風の、コインの裏側といえるかもしれませんね。

守矢 そうそう。自己責任というか、創意とか発想の転換とかに結びつくんじゃないかと思いますね。

東京清陵会のできるまで

同窓会東京支部（現・東京清陵会）が創立されたのは昭和二十七年五月だが、創立準備はその二年前から始められていたという。昭和四十三年発行会員名簿の「刊行のことば」によると、「昭和十六年頃からすでに母校の必要資金調達のため、さらに諏訪の産業開発の手伝いのために多くの古い卒業生の集いと活動が続けられ」ていた。

初代支部長は古村誠一氏（一四回、故人）、二代目が矢島八洲夫氏（一九回、故人）、三代目は野沢隆一氏（二一回、故人）だが、古い幹部諸氏の話では、東京支部を実質的に組織したのは、森元紀美雄氏（二五回、故人）だった。森元氏は同期あるいはクラス毎の私的な集まりの主だったメンバーを如水会館に集め、学年別委員や常任委員の選任、年会費の設定など次々に進めていったという。当時を知るOBの話。

「ほとんど強引ともいえるやり方でね。各学年の委員は年会費納入の責任まで取らざるを得ないような雰囲気だった。打合せの席上、うっかり一言でも喋ろうものなら『はい、お前が常任委員だ』とかなんとか任命されるから、なるべく黙ってることにしよう、とかね。だがそれはそれで、事務局の組織化という点では有効だったんです」

第一回総会が行われたのが昭和二十七年、場所は椿山荘で、約三百名が出席している。当時は今のように毎年総会が行われた訳ではなく、第二回は昭和三十三年まで待たねばならなかったが、会場は昭和四十七年の第六回総会まで椿山荘が使われた。

第二回総会が行われた昭和三十三年、最初の名簿が発行された。住所と氏名だけの簡単なものだったが、収録人数は一五六二名に上った。

間隔が明いていたせいか、総会は開くたびに大いに盛り上がった。諏中・清陵OBの間でこういう集まりが待たれていたのである。ちなみに第二回総会の会費は五百円だった。

昭和四十七年、森元氏が四代目支部長に就任する。森元支部長下での初めての総会は前述の通り椿山荘に約五百名を集めて行われたが、ここで奇怪極まりない事件が起った。当時裏方を勤めたOBの証言。

「会費の一部が忽然と消えちゃったんです。当時の東京支部は経済的に逼迫していたから、会費の余った分を支部の運営費の原資にしようと考えていた。ところが、終ってみるとその分がなくなってたんです」

このことは一部幹部の知るところとなり、尾沢賢一事務局長（三七回）を中心に善後策を講ずることになった。いろいろ紆余曲折はあったが、念のためそれまでの会計帳簿一切を引上げ、会計検査を行ったのである。その結果、判明したのは、キチンとした会計処理は一切行われていない、ということだった。要するにまったくのドンブリ勘定だったのである。

事件の真相は今ももう一つハッキリしない。森元氏は母校の創立八十周年（昭和五十年）の翌年まで支部長をつとめ、翌年、小口禎三氏（三六回）と交代した。この間不祥事でガタガタになった組織の再建の中心となったのは尾沢氏である。これを機に、東京支部の会計はすべてガラス張りとなり、結果的に雨降って地固まることとなった。

第六回以降、総会は年一回行われることになった。会場は第七回から大手町農協ビルに変わったが、総会についても、希代のアイデアマン・尾沢氏は次々と新機軸を打ち出した。その甲斐あって、参加者も年々増え、東京支部の活発さは、他校OBに羨ましがられるほどだったという。

その頃、東京に比べて諏訪の本部の方はイマイチ元気がなかった。尾沢氏は本部に乞われて諏訪に赴き、同窓会運営のノウハウを伝授したという。

昭和四十七年ごろ、十年分の年会費をまとめて一万円にし、希望者には一括して払い込んで貰ったことがある。尾沢氏の意図は、その金で新宿あたりに同窓会事務局の一室を確保しよう、というものだった。新宿であれば諏訪から出て来る人にとっても便が良いし、東京の仲間がクラス会を開いても良い――。

この話は、幹部が打ち揃って新宿の物件を見に行くところまで進んだが、結局は中止となった。ランニング・コストを考えて、幹部の間でも反対する声が強かったからである。

その結果、年会費一括納入分が宙に浮くことになった。金額にすれば一千百万円以上に上る。現在、東京清陵会には一千六百万円の繰越金があるが、大部分はその時集まったものである。これで東京支部の財政基盤は安定することになった。

もっとも財政の規模は、支部の人数からいってかなり小さいといってよい。草創期以来の大方針で、事務局経費を極端に切りつめているからである。早い話、事務局はいまだに事務局長の自宅だし、有給の事務員は一人もいない。すべて歴代事務局長とその家族、友人その他のボランティアである。

尾沢氏の後、事務局長は村上利雄氏（三九回）、保延醇一氏（四一回）、現在の林尚孝氏（五二回）と引き継がれて行く。平成四年の最新名簿には三五九八名が収録されている。

この間、村上事務局長時代の昭和五十五年、会員の経歴等、自己紹介をそのまま載せた名簿「清陵人名録」も発行された。自己紹介を載せるというのも尾沢氏のアイデアであり、この仕事に心血を注いだ尾沢氏は刊行直前、病に倒れた。

東京支部長（一九九三年より「東京清陵会」と改称）は小口氏から増沢譲太郎氏（四一回）、小平祐氏（四二回）、寺島敏郎氏（五〇回）と受け継がれて現在に至っている。森元支部長時代まではいわば個人商店の時代、小口、増沢氏時代に組織化が整い、小平氏時代以降、コンピュータ等が導入されて合理化が進められたということのようだ。

最後に、現在行われている年次総会の学年ごとの当番幹事制の由来について触れておきたい。すでに記した通り、東京支部の運営はすべて事務局長を中心とする有志の善意に委ねられていた。早い話、同じメンバーが毎年手弁当で奉仕するのである。このことは繰り返し、特筆大書してよい。

いくら何でもそれでは（特に事務局長の）負担が大きすぎる、というわけで、学年による当番幹事制が実施されたのは昭和五十三年、初代当番は四二回生（昭和十一年入学）だった。当時サラリーマンの定年は五十五歳だったから、五十五歳を迎える年に幹事を勤めてもらおう、ということだったらしい。

以上、東京清陵会の歴史を一度キチンと整理してほしい、という御要望に応えて、先輩諸氏の証言をもとに不十分ながら記録に留めることにした。

（文責＝白川浩司＝六四回）

母校インターネットホームページ訪問記

http://www.avisnet.or.jp/seiryosh

母校にインターネットホームページが誕生しました。右にホームページアドレスを示します。母校のインターネットホームページは、昨年開設されました。内容は多岐にわたっており、大きく分けて

一、学校紹介

二、在校生のための情報提供

三、クラブ活動報告

四、卒業生とのリンク

等となっています。ここでは一九九七年五月末時点でのホームページの内容を掲載します。なお、内容は編集部で選択しました。

■硬式庭球部

硬式庭球部は、昨年の長野県高等学校総合体育大会団体戦で、松商学園を下し、見事初優勝を果たしました。また、個人戦のダブルスでも、花岡・今井のペアが優勝し、インターハイに出場しました。

■野球部

野球部は、昨年度の夏の全国高校野球選手権大会長野県大会で準優勝しました。創部以来初の快挙でした。

甲子園まであと一歩のところでしたが、野球部員は完全燃焼し、多くの生徒や卒業生が決勝戦を観戦しに来ました。

左から大浦，飯田，今井，谷内，花岡の諸君

■生物部

生物部は、ミヤマシロチョウの研究で、昨年県知事賞を受賞しました。以下はその内容です。

日本産高山蝶のうちで現在もっとも絶滅が心配されているミヤマシロチョウの野外調査を行ってきた。これは一九七三年より八ヶ岳立場川（標高一七五〇m）の生息地に調査区を設定し、毎年五月の連休に幼虫がつくる共同巣の数を数えてきた。

ミヤマシロチョウの幼虫は葉を糸でつづった巣を作り、幼虫期にはその中で生活するので、毎年一定の時期に一定の範囲の共同巣の数を記録することで、長期間にわたる個体群の変動をほぼ正確につかむことができる。

その結果、一九七〇年代には三二五・三プラスマイナス六・〇個あった巣が、一九八〇年代には一九一・七プラスマイナス二五・二、一九九〇年代には四九・六プラスマイナス六・四と減少していることがわかった。ミヤマシロチョウの長期間の個体数の変化が、今回の研究で初めて明らかにされた。

ミヤマシロチョウの個体数の減少の原因については、これまでに、

一、生息地の環境破壊

二、農薬散布

三、採集圧

などが指摘されてきた。しかし、今回調査を行った立場川のフィールドは、一九七二年にミヤマシロチョウが地元町村の天然記念物に指定され、採集が禁止されるとともに生息地が保全されてきたので、他の原因があることが予想された。そこで、一九九六年に、調査地内の全植樹（ヒロハノヘビノボラズ）をマーキングして、その生息状況・共同巣の有無などを調査したところ、

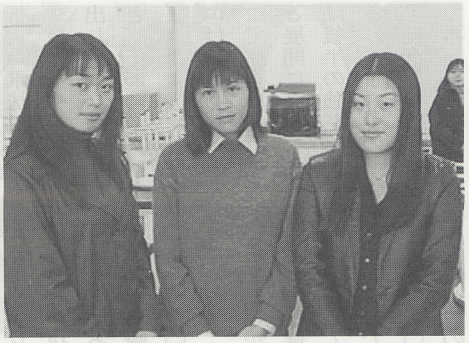
一、若木は全くなく、植樹は老化していること

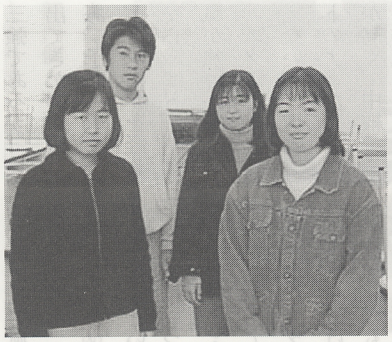
二、植樹の上空を他の木で覆われると植樹が枯死、衰弱すること

三、全体の六五・二七％の植樹が上空を覆われ、日当たりが悪いこと

四、ミヤマシロチョウの成虫は林内に飛来しないので、これらの木には産卵されないこと

などがわかった。





左から鈴木，小原，滝沢，竹内，北原，宮澤，中村の諸君

一九七〇年代からの環境写真を並べてみると、生息地が急速に森林化していく様子がつかめた。ミヤマシロチョウの植樹は崩落した斜面などに真っ先に生える潅木である。立場川では、生息地を保全したために、植物の遷移が進み、かえってヒロハノヘビノボラズの老化・枯死を招き、ミヤマシロチョウの個体数の減少をもたらした。たびたび洪水や崩落が起きて植生が壊されることがミヤマシロチョウの生息には不可欠だと言える。生息環境を保全しただけではミヤマシロチョウを保護したことにはならないことがわかった。

■クイズ研究会

本校クイズ研究会は正式名称を「長野県誠訪清陵高等学校クイズ研究会」といい、愛称を「QLASH」（Quiz Lovers' Association of Suwaseiryo High School）といいます。今年で創設から八年が経ち、創設以来五〇名以上の会員を世に輩出しているクイズ団体としては比較的伝統ある組織であります。現在、クイズによる社会常識的な知識の蓄積と、個人専門分野における情報収集・解析を軸に会員各自が積極的な活動を行って

います。また、ただ単に知識を詰め込むだけでなくあらゆる体験を通して、この混迷する社会に立ち向かえるような優秀な人材の育成にも生徒を主体としながら、全力を尽くしています。

主な活動としては週一回の例会でのクイズと年に一回の「新入生クイズトーナメント」(四月)「清陵クイズオープン夏の祭典」(七月)の開催、そして日本テレビ「ライオンスペシャル全国高等学校クイズ選手権」(高校生クイズ)の出場であります。第一回の例会はクイズ基礎知識の養成と高校生クイズ対策を主に行っています。

本会は昨年夏に行われた「ライオンスペシャル第一六回全国高等学校クイズ選手権」中部予選に四チーム出場し、そのうち「小林チーム」(小林聖、宮坂洋平、小嶋章史)が長野県代表となり全国大会出場を果たしました。本校から全国大会への出場は通算四回目で、クイズ研究会としては第一四回大会「牛山チーム」、第一五回大会「重野チーム」に続き三年連続の全国大会出場を果たし、栃木県「石橋高等学校」と共に「東日本の雄」としてその名を全国に轟かせています。また今回全国大会に出場した「小嶋」は全国的にも例の少ない二年連続全国大会出場を果たし、本校クイズ研究会は、もはや長野県内では右に出るものがいない実績を上げています。

全国大会の結果は過去第一四回の「牛山チーム」、第一五回の「重野チーム」が一回戦敗退でありましたが、昨年はまずまずの健闘で準々決勝までコマを進めました。

また校外交流も積極的に行い、特に「松本深志高等学校クイズ研究会」(松本市)とは数年来お互いの会員の交流を積極的に進め、連絡を密にとっています。そのほか毎年七月の「清陵クイズオープン夏の祭典」に際しては長野県内二〇校、山梨県「甲陵高等学校」(山梨県長坂町)に参加を募集し多くの他校生にも参加して頂いたり、遠くは徳島県の「徳島文理高等学校」(徳島市)とも連絡をとっています。

このように部活動団体とはまた違った方向性で活動を行っておりますが他の部活動ではなかなか成しえない「全国区」への進出を行い、それなりの成果もきちんと修めており、学校のイメージアップ、名前の拡大にはかなりの効果をもたらしていることでしょう。また、その活動内容も同好会とは思えないほど内容の濃いものであり、日々の努力が「三年連続高校生クイズ全国大会出場」で証明されております。更にこれからもよりクイズ研究会が発展しますよう努力を続ける決意であります。

小嶋君

宮坂君

小林君

■端艇部

端艇部女子は昨年のインターハイで準優勝しました。以下はインターハイ奮戦記です。

準決勝。さすがにここまでくると気を抜いたレースはできないだろう。たとえ大丈夫と思っていても「決勝に向けて力をセーブして」という小細工は通用しない。実力的には加茂(高校)と宮川(高校)が他に比べて一歩リードといった感じだが、六月の中日本レガッタでは、清陵は両者に水をあけて勝っている。ここは自信をもって後半勝負だ。

スタートで清陵はやや出遅れるが予想通り互角の勝負。前半は宮川がやや先行し、由利がこれを追って健闘している。清陵はトップと〇、四秒差で五〇〇mを三位通過。宮川は十分に射程距離内だ。後半安定してハイレート(四〇)をキープしたこともあって、宮川に一艇身つけてトップでゴール。地力のある加茂も由利をかわして決勝に進出した。好コンディションに恵まれてリズムにもキレが出てきた。後半飛ばしてバテたかな? という心配は不要で、彼女たちの表情にはまだまだ余裕が感じられる。沸き立つ応援団の中には、なんと校長先生の顔も見えるではないか。

そんな雰囲気の中で「このままいけば優…」とつい言いかけたが、それは言葉にできなかった。「頂点を極めることの難しさ」を乗り越えるのはこれからである。とにかく今はできることに集中する。それだけだ。

いよいよ決勝。このレースを一年間どれほど待ち望んできたことか。顔ぶれはほぼ予想通り。加茂、宮川の他に十津川(奈良)、喜多方女子(福島)、酒田東(山形)である。この中で十津川は春の選抜大会決勝で顔を合わせている。また酒田東には昨年のインターハイ決勝メンバーが一人残っているが、実力としては加茂、宮川、清陵が三強であろう。レースを前にして風が出てきたのが少し気がかりである。まあ、予選、準々決勝は同じようなコンディションを経ているから…という安心感はあるのだが、今日はちょっと風が強いようだ。水面の波も高いし…。

スタート! 観覧席からは遠くて見えないが、清陵クルーは無難なスタートのようだ。やはりスタート付近は波が高く、中継モニターで見ていても時折白い飛沫が上がるのがわかる。レースはどうやら加茂、宮川、清陵が抜け出しトップ争いの様相を呈している。と、その時であった。清陵艇が一瞬止まったように見えたのである。四〇〇m付近で必死に波と闘っているが、ここで完全に先行されて相手を追いかける展開になってしまった。しかし選手は後半の強さに絶対の自信を持っているはず…。その予想通り五〇〇mでの半艇身差を徐々に取り戻し、七五〇mで再びトップ争いに加わった。この時

北信支部だより

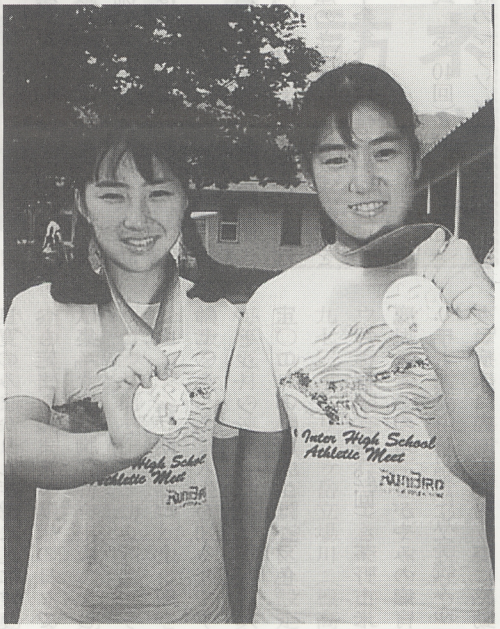
諏訪清陵高等学校同窓会北信支部は現在、北信地区在住のOB約二二〇名が会員となり、年に一度、総会を開いて懇親を深めています。

今年は善光寺の御開帳があり、長野市内も大変な賑わいを見せました。来年は長野冬季オリンピック大会、パラリンピックを控え、今年二月には各種競技のプレ大会がエオリンピック会場を使用して開催されるなど、何かとこの地区に注目が集まっております。活気に満ちた長野です。

当支部総会は当初、長野県職員の方が中心になって運営してきましたが、現在はOBの多い企業が交代で幹事を務めております。今年の総会は二月二十一日、長野バスターミナル会館で行われ、女性二名を含む八〇名が参加、時の経つのを忘れて大いに盛り上りました。最後の校歌斉唱では殆どの会員が歌詞を見ないで歌い、肩を組む輪も大きくなりました。県北にありても、瞼を閉じると気分は若かりし日の清水が丘に戻っておりました。

高速道路の開通に続き、本年十月には待望の新幹線も開通いたします。東京―長野間は非常に近くなりました。東京清陵会の会員の皆さまもぜひ、北信にもお越し下さいますよう、お待ち申しあげております。

(茅野實＝52回)



左・下鳥まどかさん　右・宮坂真理さん

点でのトップは加茂。と、今度は加茂が腹切り（オールを水に引っかけるアクシデント）してスローダウン。三位に転落してしまった。隙をついて宮川と清陵がトップ争いに踊り出る。八五〇mで清陵がわずかの差でトップ！いけるぞ！しかし、ここで再び艇が曲がりブイを叩いてしまう。そしてラストの三本を無難に漕ぎ切った宮川が一瞬早くゴールに飛び込んでしまった…。

もちろん誰もが優勝を目指してこの決勝に臨んでいたはずだ。しかしレース後の彼女たちの表情にはどことなく不思議な戸惑いがあるように見えた。今まで相手クルーと競い合うために培ってきたパワーやテクニックが、すべて波や風との闘いに費やされてしまったからだろうか…。それが自然を相手にするスポーツの宿命だといわれても、やはり不完全燃焼的な気持ちは拭いきれないものがある。

確かにレースはやってみなければわからない。どんなに強いと言われていても、それで優勝が約束されるわけではない。インターハイとは「実力があるだけでは勝てない」不思議なレースである。波にオールを取られたのも、曲がってブイを叩いてしまったのも結局はそれが実力だったということなのだろう。しかし一方でここまでやってこれたという満足感が選手たちの顔にあふれていた。ベストを尽くして臨んだ結果がどうあれ、ここまでやってきたんだという自信と誇り、そして仲間たちへの信頼は何物にも代え難い財産なのだ。

「胸張って諏訪に帰れよ！」という応援団の言葉には、さすがに胸が熱くなった。

■一九九七南信高校総体

漕艇競技観戦記

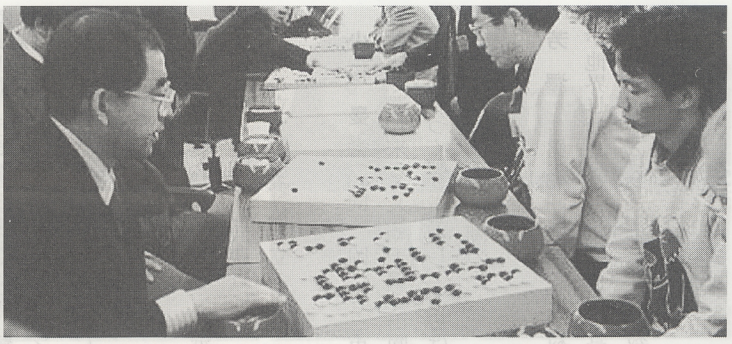
五月一七日下諏訪漕艇場で右競技が行われ、諏訪清陵が優勝した。二位は下諏訪向陽、三位は岡谷南であった。以下は観戦記です。

諏訪清陵の中盤の駆け引きのうまさが光るレースだった。（でも調子にノるなよ、仁！）勝っても負けても県大会進出ということで、死力を出し尽くしてのレースではなかったが、対向陽戦の「勝ちパターン」を確認する意味では大きな収穫であった。向陽は如何に後半に自信があるとはいえ、前半抑えすぎ。

「南信は勝っても負けても…」という気持ちでは、全国で叩きのめされるよ…。おっとその前に全国に行けなくなるよ…。スタートのスピードと、最後のスパートは他クルーがこれから仕上げてくるところ。果たして逃げ切れるかな？　県大会が楽しみだ。

■囲碁同好会

囲碁同好会のメンバーではありませんが、今年三月卒業の浜裕之君は、全国高校囲碁選手権長野県大会で優勝三年連続で全国大会に出場しました。全国大会では、二回戦に進出してから、惜しくも破れましたが、大健闘でした。また、全国高等学校総合文化祭の囲碁部門個人戦にも出場し、全国で二一位となりました。



武宮元名人と対戦する浜君

◆編集部より◆

最近の調査（インターネット白書'97）によると、日本のパソコン所有者のうち二一六万人がインターネットを使っており、さらに会社や学校等で使用している人の、いわばインターネット総人口は五七二万人と言われています。

今後さまざまな形で社会のしくみを変えてゆくひとつの基礎技術であるインターネットです。東京清陵会の皆さんもまず、トライしてみてはいかがでしょうか。

東海支部だより

当支部は、愛知、岐阜、三重で活躍していた同窓生を語らい、昭和五十一年十一月に設立された。会員は多い時は二四七名、現在では一七〇名。以来、今日まで十四回の総会を開き、懇親を深めている。例年二月の第一土曜日に開催することを決め、今日に到っている。

第四回総会（昭和六〇年）からは同窓生の中から講師を呼び、講演していただくことが恒例となった。最初の講師は飯島宗一氏（四一回、名古屋芸創センター会長）である。

以下、内藤昌氏（五一回）の「城下町の昔の現在」、山田昌氏（四〇回）の「死後の世界」、小口高氏（四八回）の「宇宙科学から見ても地球環境」など、魅力的なテーマが並んでいる。

母校百周年記念事業では、東海支部も大いに協力しようということで役員一同知恵を絞った。当地方は瀬戸の陶芸で知られているが、その粋ともいえる赤津霞仙陶園に依頼し、織部焼の額と諏訪大盃と黄瀬戸で焼成してもらい、母校に寄付することにした。今、玄関に飾られているのがそれである。

当支部は、役所、企業の転勤で東海地方に住むことになった若い方々の参加が少いように思われ、それが今後の課題となっている。

（小山良治＝42回）

三行短信

有賀　博(26回)　上諏訪
青葉若葉の諏訪を、特急あずさの窓から、ちらり見つける母校の姿、あの頃の学友に会うこともなし、ああ

土田　三千雄(27回)(旧姓森元)米沢
九十歳になりました。故郷米沢の山河と、恩師、菊池(ナワチ)三沢、三輪、河西(健)外の先生がなつかしい。

小林　又蔵(32回)　富士見
今年八十五歳の高齢にて何かと頑張って来ましたが昨年の暮頃より風邪が原因で体調不順と成り目下通院中。

立木　長俊(32回)　茅野市泉野
大正三年生れにて適齢期と存じ昼のクラス会でも参集は五～六名位夫れ〳〵病を抱へて居る状況私自身最若の方ですが骨粗鬆とか夜の長歩は不可の現況只管若い諸氏のご活躍を期待致します。

大和春雄(穂)(33回)　岡谷市
草原は青と緑・ラグビーボールの様な空間風に舞う・花開く陽光は鮮麗・自然の素顔・霧ケ峰の永遠を想う。

小口　徳二(35回)　下諏訪
戦後日本は見事な経済発展を遂げました。しかし同時に大変な道義の頽廃や悪質な事件が発生しています。皆さんこれからは立派な日本人として道義の確立につとめませう。

立川　義明(36回)　上諏訪
友の母者初日の出を拝み雑煮を食べ写経し九十歳で逝くを聞き、良寛の般若心経出し写すに旬日続きしのみ。

堀田　幸孝(36回)　落合
30年ぶりでハワイに行ってきいた事、米国では小学生の登下校は必ず親が送り迎えをしなければならないと法律できめられている。従って須磨の様な事件はないとの事。これが義務教育の一面。

中島　彦吉(38回)　岡谷市川岸
校歌作詞者伊藤長七先生について月刊『オール諏訪』平九の五、六月号に掲載。機会あらばご覧の程を。

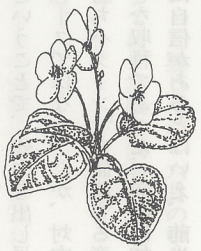
藤森　鐵雄(38回)　上諏訪
大自然の厳しい寒さで心身を鍛え、友達との交流で人間形成に役立った諏訪での生活は、私の大きな財産です。

細川　俊介(39回)　富士見町
砂糖の三〇〇倍甘く糖尿病によく効く、南米産のキク科の植物ステビアを育てて二十余年、苗を無料配布。

林　武志(40回)　岡谷市
諏訪湖一周のマラソンを五年間走ったことは、半世紀以上経つのに昨日のことのように懐しく思い出されます。

今井　武喜(41回)　上諏訪
牛山伝造教頭先生の教訓「やれば出来るじゃないか」試合は勝つ為のもの(当時排球部長として優勝した時)

小口　陽一(41回)　岡谷市
国防を他国に委ね、能動的外交判断のできぬ日本。「千万人と難も吾往かん」こそ吾が魂の原点と悟る。



長田　和雄(41回)　茅野市永明
良寛のみまかりし年齢(とし)こえにけり心構へも定まらぬまま。臥床の日々ですが歌集「うすき胸郭」を出版しました。

山本　哲朗(41回)　上諏訪
齢七〇をこえて人生を知る今です。やっとジャングルを抜け出して健康が宝。これあれば人生はバラ色。

片桐　好(42回)　茅野市米沢
鹿児島寿蔵の句「ながやみの癩肯となり手も萎えて舌端に点字読みゆく吾友」病床に尚向上を希う姿に感動。

久保　光保(42回)　本郷村
旧校舎の中庭に、短艇の古オールで造った太めの平行棒があり昼休みにはよく倒立などして遊んだものだ。

小林　保(42回)　茅野市
県の実験学校、出身地にて勤務、授業をはじめ、野球、バスケ、バレー、運動会、雑談に皆の姿を思い出す。

森元　亮(42回)　米沢
三年生の本試験矢沢大二先生が監督、ミスを指摘してもらい落第点をとらず進級した。思出は今や半世紀前の神話となる。先生は正に人生の大恩人。

岩波　芳登(43回)　諏訪市中洲
戦後50年、近頃の身にそぐわない鬚の流行を見るにつけ、見事な鬚のデンキサ恩師牛山伝造先生の気品と威厳に満ちた温容が懐しく思い出されます。

帯川　要(43回)　米沢
仮小屋に臥して開きし武蔵野に
　ビル立ち並び野仏も立つ

小松　曼耆(43回)　岡谷市
春夏秋冬巡り来るも今や干頃の田園見えず煤煙つづく製糸場なし。あるは高き八ケ岳ひたす諏訪の湖のみ。

芳澤　勇(43回)　原村
妻が他界し独り暮し13年。新宿の高齢者学習団体連合会長・杉並の千数百世帯の町会長など多忙の毎日です。

荒木　實(44回)　原村
眼科開業十五年。古希を過ぐ。「あゝ博浪の槌とりて」校歌を口ずさむ時、澎湃として青春の血が甦る。

唐木　正敏(44回)　上諏訪
久し振りの帰省は、ふるさとの美しい風土と、人々の素朴さが心にしみて、疲れをしばし癒してくれます。

濱　隆夫(44回)　上諏訪
歳を重(かさ)ねると、月日の流れの速やさに驚きもし、古き諏中運動会の「棒倒(ぼうたおし)」のスクラムを思う。清陵健児に幸(さち)あれ。

三井　知夫(44回)　富士見町
故郷を離れて既に五十有余年。山紫水明の郷土を誇りとし、年に数回は帰省して浩然の気を養っています。

林　四郎(45回)　岡谷市
政官と癒着した新聞TVの自己変革なしに信頼出来る情報はなし。長命は罪悪なりと覚悟、悲しきかな。

五味　大介(46回)　茅野市玉川
先日〝清水ケ丘46〟と云う写真集が出来た。戦時中で卒業式が出来なかった。思い出と心のよりどころになると思う。

矢花　槇堆(46回)　諏訪市豊田
この地に住みついて四〇年。故郷時代の倍の年月だが、まだ假住いの感じで落着かない。故郷はいい。

萩原 伸（48回） 上諏訪
住専・生保・ビッグバンそして消費税アップと八方塞がり、せめて、旧友と談笑したいと思うこの頃です。

机 永治（49回） 茅野市金沢
諏中最後の卒業生そして清陵最初の卒業生もすでに六十代後半、歳月の流れを実感する今日この頃です。

中村 登紀夫（49回） 下諏訪
齢がいもなくTVギャラクシー賞の選考委員をつとめ、うんざりする程番組を見ています。地獄の日々です。

名取 小一（49回） 富士見村
諏訪中学はやはり心のふるさとです。この心に帰れば何時もさわやかな元気がよみがえります。

宮坂 敏彦（51回） 上諏訪
「ああ搏浪の櫂とりて」一人で口ずさんだ第一の人生。再び旧友と歌える楽しき第二の人生驀進中。原点は常に清陵。

三井 武良男（52回） 富士見町
母校の裏山にかけ登った健脚はいま何処。駅の階段を苦しんで登る。もっと楽なシステムよ現われてくれ。

小松 武義（55回） 茅野市米沢
89歳の母の話し相手に女房と時々ちのを訪れます。晴、雨、小雪の日など。長く続くよう願っています。

青木 瑞枝（56回） 上諏訪
町医者の現役で雑用に迫われる日々。元気の素は借金外国旅行音楽会など連休はイランへ、ペルシャ文化に感激。

岩波 紀久（56回） 上諏訪
還暦過ぎましたが、近くの中学校でまだ教えています。やはり「原点は清陵高校にあり」と思っています。

守矢 徹生（56回） 茅野市豊平
帰省すると眼前—東に高き八ケ岳、北に優美な蓼科山。天は広がり。大気は澄み。しばし心遊ばせている。

白田 充（57回） 上諏訪
長年勤めていた読売新聞社を一年半前に定年退職。いま関連会社で編集・出版関係の仕事をしています。

春日 清弘（59回） 朝日村
平成八年七月、長い間勤務した国税の職場を退官し、現在は東京・神田で税理士の仕事を行っています。

窪田 弘一郎（60回） 東京
58歳で十代の若者と共に大学生になった同級生が「総代になる！」。玄徳も広重も還暦から大成。さあ、みんな一歩前へ。

中村 梧郎（62回） 岡谷
戦場の枯葉剤（岩波書店）刊行と受賞を機に信州六市で写真展を開きました。同窓会と62回生、信毎に感謝。

山田 紀子（62回） 岡谷
塚原先生の英語の聴き取りは新鮮でした。外国に暮し、高校で正統な英語を習った事を幸いに思いました。

武居 俊樹（63回） 岡谷
元気な中年は、遊びに仕事に忙しく過ごしてます。そんな中で、フト故郷の山河に思いをいたす今日この頃。

藤森 宏一（63回） 上諏訪
55歳時での東京会の当番幹事役は同期生との再会交歓には絶好の機会。話題豊富なれど健康問題の何と多さ。

宮坂 光彌（63回） 原村
昨年幹事学年。月一度の準備会は在学中よりも深い交流を促進。清陵は遠く離れ、時間を経て一層魅力を増す。妙な学校。

亘理 美代子（63回）（旧姓矢澤）中洲
三月、二十七歳の長女が虚血性心不全で急逝。小学校は皆勤だった娘が何故、と涙が乾かない毎日です。

古室 博道（64回） 諏訪市
時たま東中野の「わらじ屋」へ行って旧友の顔を見るようにしています。

林 博優（64回） 下諏訪
役所広司の役は期待できないし妻は友の方が芳しい様でやはり今は仕事に専念しながら自分の城を持つべく頑張っています。

古村 浩三（65回） 上諏訪
三年間入り浸った「牛正」の研究室、安保反対のデモ、徹夜で準備した清陵祭。以降の私の思考・行動の原点がここにある。

中島 基貴（65回） 岡谷市川岸
香料の研究に三十年携わっています。プロデュースした大分香りの森博物館が開館致しました。ご参観下さい。

小池 章博（66回） 上諏訪
同窓会で初めて卒業写真を見た。何故だ？ 三年生最後の授業以来清陵に行ってない。卒業せずはやいくとせ。

加藤 昱夫（68回） 辰野
四コマ漫画誌『まんがタイム』の編集に忙殺され、ストレス解消に釣行できる日を楽しみにするこの頃です。

木村 信夫（68回） 湖東
吉江清朗・小泉力・丸茂眞各氏など先輩の自然洞察を励みに編集の日々、風土産業のDB作成が今も夢です。

飯島 由美子（70回） 下諏訪町
長野へ単身赴任の夫に続き息子が下宿生活を始め、反抗期真直中の娘達との三重生活ですが、がんばってます。

両角 明（78回） 岡谷市
自らも四十路に足を踏み入れて改めて思う。時の流れの速さと日々の生活に追われる我身の悲しさとを。

トピックス
小口元支部長、傘寿の祝い

元東京支部長で岩波映画製作所会長小口禎三氏（三六回、岡谷市出身）の「傘寿を祝う集い」が、六月一三日、神田如水会館で開かれた。

傘寿即ち八〇歳とともに、小口氏の著書「映画ひとすじ五十年」（A5判二三〇ページ）の出版記念も兼ねた会であり、この本は一九五〇年の岩波映画製作所の創立から今までに、日刊紙、映画雑誌、業界紙誌、同窓会誌などに、折に触れ寄稿した論文や随筆・紀行などを一冊にまとめたもの。

当日は、岩波映画で数々の優秀作品を生み出したプロデューサー、脚本家、監督、キャメラマンをはじめ、記録映画、教育映画など映像作品の製作業界の役員諸氏、さらに、優れた映像文化を広める活動を進めている市民組織の代表など、小口氏と親しい人々一二〇人余が駆けつけ、盛大に祝った。

東京清陵会からは、寺島敏郎・林尚孝・正副会長ら一〇名が参加した。

なおこの本は残部多少あり、一〇月九日の東京清陵会総会の折、希望者先着五〇名に進呈いたしますので、御希望の方はお申し出下さい。

東京清陵会30周年記念総会報告

九六年の東京清陵会は「創立三〇周年記念総会」と称して、一〇月二五日(金曜日)、前年と同じ虎ノ門パストラルの「鳳凰の間」で開かれた。参加者は雨天にめげず三一〇名、百周年で盛り上がった前年の三一七名には及ばなかったものの、まずは大盛況。

心配といえば、この日、母校恒例の諏訪湖一周マラソンが重なり、終了してから松下勲校長先生らがバスで上京するとのこと。しかもこのバスにはアトラクションでお願いした「諏訪八剱太鼓」保存会の皆さんも道具一式とともに同乗しており、気をやむこと数時間。五時過ぎに無事到着してこれもホッ。松下先生は、この夏、まさかまさかの甲子園に片足掛けた野球部の奮戦写真パネルと盾を持参してくださった。急いでロビーに展示してあった県大会関係の新聞パネルに追加して並べると、開会を待つ同窓生からあらためて感嘆と「残念」の声があがる。

また同じロビーには、九三年に脳内出血で倒れられた小平恒彦先生(四八回)のリハビリを兼ねたパステル画一〇点を特別に拝借して掲げ、九八年長野オリンピックのスピードスケート代表選手に内定している上原三枝さん(九三回)のパネルも展示した。合わせて幹事六三回生首唱という形で、上原選手へのカンパをお願いしたところ、たちまち一八万円強に達した(後日、上原さん所属のJNF社にお届けしました。ご協力に感謝いたします。)

六時、幹事団・宮坂光弥君の司会でスタート。藤森宏一代表幹事の開会宣言のあと、この一年間に亡くなられた三六名の東京同窓会メンバーの方のご冥福を祈って黙禱。続いて小平祐東京清陵会長、宮坂久臣本部同窓会長、松下校長がそれぞれあいさつ。宮坂会長は「今後は育英資金の充実を図りたい」と、松下先生は「いい意味での文武両道、進学がよい年はスポーツ・芸術の成果もよい」と、進学成績と野球部以外の活動ぶりも報告された。

議事の中では今回特に、役員改選が認められた。八八年から八年間会長をつとめられた小平祐さんのほか、小松誠副会長、名川方敏監事が退かれ、新たに会長に寺島敏郎さん(五〇回)、副会長に林尚孝さん(五二回)と渕上良子さん(五六回)、監事に小松誠さんと今井恒夫さん(五七回)が選出された。

小平さんは「副会長から合わせると一〇年。母校の百周年行事も成功を納め、皆さん方のご協力に感謝します」と述べ、寺島新会長は「二一世紀は高齢化社会、OB世代とこれから本格的に参加してくる若い世代の交流の場として、発展させていきたい」とあいさつ。続いて小平さんと名川さんのお二方に感謝状と記念品が贈呈された。

あとはパーティ。これも恒例となった「真澄」二斗樽の鏡割りは、最年長OBの有賀博さん(二六回)、小口禎三さん(三六回)、本部の有賀裕副会長(五〇回)、女性&若手代表・西村いづみさん(七七回)のお四方で「いっせのせ」。三井為友さん(三〇回)の音頭で乾杯。

アトラクションは諏訪八剱太鼓打ち鳴らし。保存会の宮坂裕次さん(五一回)と小松清一さん(五五回)と、女性も含めて(というより過半が女性)八名による迫力満点の演奏。会場内に分け入っての演技もあり、拍手喝采。二回に分けて、「神楽太鼓」「神渡り」「霧ケ峰雷神」の三曲が披露された。

宴もたけなわ、これがないと終わらないのが校歌斉唱。当日参加した幹事六三回生約八〇名全員が壇上に上り、「ボロボロ帽子に白線巻いた」柳平英孝君のリードで「一、二、三」。もちろん「東に高き…」の第一と、「ああ博浪に…」の第二をフルに歌わないとダメ。

締めくくりは、次回九七年総会を担う六四回生から祖父江宏三さんが「まかせてよ!、先輩」と決意表明されて、引き継ぎ完了。なお当日の記念品は「雖千萬人吾往矣」の手ぬぐいと、諏中・清陵の校章入り手ふき、「三〇回記念」のネームをつけた缶ビール一本でした。

(小平協=六三回)

本部同窓会定期総会報告

平成九年度同窓会定期総会は六月二十二日(日)、午後一時より諏訪市の諏訪シティホテル成田屋にて行われた。参加者は一三〇名、一番の高齢者は九十九歳の古村敏章氏(一八回)であり、ご子息ともども出席された。

総会の司会は六四回生の小口高広君。開会の挨拶は寺島敏郎東京清陵会会長(五〇回)。まず物故会員を偲んで黙禱。宮坂久臣同窓会長(四九回)、松下勲学校長(五九回)の挨拶に続いて、三井章義下諏訪支部長(五一回)を議長に選任する。通常どおり、会務報告、決算予算案等を承認の後、清陵高校クラブ活動同窓会後援会(詳しくは同窓会報)の件を承認した。支部長紹介、六五回生の藤森輝男君の次年度開催の決意表明の後、渕上良子副会長(五六回)の閉会のことばにて総会を閉じる。

続いて、小菅前会長の叙勲を祝って、同窓会から記念品が贈呈された。

記念講演は六四回生の海野光三郎君が「知恵出し競争の時代の経営」の演題で行った。起業家としての体験から、とくに社員教育に関する部分は新しい発想が随所にみられ、一時間半が短く感じるくらい素晴らしいものであった。司会は六四回生の山崎晃君。

続いて六四回生の小泉健二君の司会で行われた懇親会にも一二〇名が参加、開会のことばは有賀裕副会長(五〇回)、乾杯は小口禎三氏(三六回)。六五回生の指揮で、久し振りに校歌を歌い、さらに盛り上がる。万歳は茅野實副会長(五二回)、閉会のことばは小山良治東海支部長(四二回)、六時に終了となる。

(小松修治=六四回)

お店探訪④

池袋「天龍」の巻

毎回同窓生の経営するお店を紹介して好評を得ているこの欄、今回は池袋東武デパート十二階「東武スパイス」の一画で、サンシャインビルなどが一望に見渡せる「天龍」の巻である。

「女性客が七割以上です。食事である和風の御膳は信州の味と香で」と主としてご婦人方への心配りの一方で、「酒はやや甘口の伊那谷の銘酒『天龍』大吟醸や純米酒など」とノンベエには何とも嬉しい話。

肴は霜降肉の馬刺、鮎塩焼き、冷焼茄子など、新鮮な素材によるメニューが揃っている。

そもそもこの「天龍」なるお店、食料品卸業の米澤義槌氏（三五回生、上伊那郡中川村出身、実家は米澤酒造）が、二五年前に東武鉄道の社長に口説き落されて開店したのだとか。

「気楽においしい料理を安く、と心掛けていますから、常連さんが多いんですよ」と店担当の長男・米澤英樹副社長（七〇回生、東京）の弁である。

たまたま取材に訪れた日、別のテーブルでは、老紳士二人が諏訪弁丸だしで霧ヶ峰の話をしながら、しきりに杯を交していた。

店内は和風造りで、四人用テーブルから八人用の丸テーブル、座敷に五卓と合計五十六席。時刻によってはデパートでの買物帰りの客で混合い、入口の待席も溢れる。

また、デパートという場所柄もあってのことだろうが、ウエイトレスがそれぞれ美女の上に接客態度が大変にいいのは嬉しいことだ。

御膳（食事）は「あずさ川」一九八〇円、「信濃路」一六八〇円、「木曽路」二四五〇円。

「指をしゃぶって一升酒」てな人は別として、呑助にとって肴はまた楽しみなもの、この店の酒肴は豊富だが、新鮮な魚の刺身は当然として、馬刺一四八〇円、蟹の磯辺焼き八八〇円、海の幸サラダ八八〇円などがある。そして酒はといえば『天龍』純米酒一・五合が九〇〇円。

酒の後、あっさり食事という向きには茶そば六八〇円なんてのは如何。

デパートは定休日でもここは営業していてほぼ年中無休だが、グループは是非予約を。

電話〇三―五三九一―二二〇〇。

東京清陵会の現況

（一九九七・六・二五現在）

データベースから東京清陵会の現勢を見ると次のとおり。

一、同窓会東京清陵会会員の定義

(1) 首都圏（東京、神奈川、埼玉、千葉、群馬、栃木、茨城）在住の同窓生（ただし、退会申入れ者を除く）。

(2) 転居して首都圏を離れたが支部会費を納入している同窓生。

二、会員現勢：総数　四、〇六八名（住所不明者三二九名を除く）

(1) 都県別会員数

内訳　東京都：二、〇四七名　神奈川県：八三五名　埼玉県：四五三名　千葉県：四九六名　茨城県：九一名　群馬県：二八名　栃木県：二四名　その他：九四名

(2) 年次別会員数（別表1）

三、会費納入状況（一九九二・四～一九九七・三会計期）

(1) 納入者総計　二、〇七九名

(2) 年次別会費納入者数（別表1）

(3) 年度別納入額および人数（別表2）

一九九六年度会務報告

一九九六年

8・22　第二回女性の集い＝ホテルサンルート東京、一八名出席

8・26　第四回編集会議＝東洋経済新報、六名

9・19　東京清陵会だより第七号四一六二通発送

9・26　総会打合せ会議＝南青山会館、二六名出席

10・25　第三〇回東京清陵会総会＝虎ノ門パストラル鳳凰の間、63回生担当、三〇五名出席。小平祐会長退任、寺島敏郎氏（50回）新会長に就任。小平祐前会長ならびに名川方敏前監査幹事に感謝状と記念品を贈呈。出席者に三〇回総会記念手拭いなどを配布。諏訪八剣太鼓打ち鳴らし（諏訪八剣太鼓保存会＝代表51回宮坂祐次）、小平恒彦氏（48回）のパステル画などを展示、上原三枝氏（93回）の写真などを展示・会場カンパ（一八五、四〇〇円）

11・6　第七回東京清陵会ゴルフコンペ＝千葉セントラルゴルフコース、参加者二〇名、優勝小平清（64回）

別表1　年次別会員数と会費納入結果（6月25日現在）

回	現員	不明	計(費)	回	現員	不明	計(費)	回	現員	不明	計(費)
18	2	0	2(—)	46	80	1	81(55)	75	49	10	59(14)
19	1	0	1(—)	47	77	5	82(56)	76	40	10	50(15)
21	4	0	4(—)	48	83	2	85(57)	77	55	11	66(24)
22	2	0	2(—)	49	122	2	124(75)	78	52	15	67(15)
23	7	0	7(—)	50	102	5	107(73)	79	49	13	62(19)
24	1	0	1(—)	51	115	5	120(78)	80	40	11	51(9)
25	7	1	8(—)	52	125	1	126(91)	81	41	12	53(11)
26	8	1	9(—)	55	37	0	37(25)	82	38	13	51(10)
27	10	0	10(—)	56	122	6	128(79)	83	67	23	90(29)
28	19	1	20(—)	57	130	3	133(87)	84	50	6	56(14)
29	6	0	6(—)	58	117	3	120(79)	85	63	11	74(10)
30	16	0	16(—)	59	113	6	119(69)	86	45	5	50(7)
31	17	1	18(—)	60	122	6	128(81)	87	31	3	34(1)
32	20	3	23(—)	61	116	3	119(72)	88	34	5	39(7)
33	21	1	22(—)	62	117	4	121(56)	89	36	3	39(4)
34	25	0	25(—)	63	117	2	119(69)	90	25	6	31(3)
35	36	0	36(—)	64	97	2	99(58)	91	21	6	27(1)
36	34	3	37(—)	65	79	4	83(33)	92	18	0	18(0)
37	23	2	25(15)	66	90	6	96(43)	93	11	2	13(2)
38	40	1	41(32)	67	97	7	104(35)	94	4	0	4(0)
39	37	1	38(28)	68	92	7	99(38)	95	3	1	4(0)
40	37	0	37(29)	69	92	7	99(41)	96	10	0	10(1)
41	58	0	58(38)	70	100	8	108(38)	97	2	0	2(0)
42	53	1	54(47)	71	71	12	83(25)	98	2	0	2(0)
43	60	0	60(45)	72	57	11	68(21)	計	4068(329)		(2024)
44	67	1	68(45)	73	50	16	66(21)				
45	61	1	62(43)	74	80	11	91(33)				

注）1）（　）内は前会計期（1992.4～1997.3）会費納入者の人数
75歳以上（36回以前）の会員は会費免除
2）不明者は以前東京支部に登録されていて現在所在不明のもの
3）前会計期（1992.4～1997.3）は1997年3月で終了
4）前会計期納入人数2,079名と納入者数2,024名の差は前納者、転出者、物故者などにより生じた

別表2　年度別納入額および納入者数

前々期納入額総計（1987.1～1992.3）5,993,670円				
内訳	～1987年4月	小計	70,000円	(7名)
	1987年4月～	小計	3,378,200円	(1,111名)
	1988年4月～	小計	342,000円	(110名)
	1989年4月～	小計	43,600円	(9名)
	1990年4月～	小計	1,247,285円	(435名)
	1991年4月～	小計	912,585円	(170名)
前期納入額総計（1992.4～1997.3）10,936,585円				
内訳	1992年4月～	小計	4,351,185円	(1,021名)
	1993年4月～	小計	2,090,400円	(353名)
	1994年4月～	小計	1,428,800円	(236名)
	1995年4月～	小計	1,855,600円	(289名)
	1996年4月～	小計	1,210,600円	(180名)

11・14　六四回生第一回打合せ会議＝中野わらじや、20名

一九九七年

1・23　第三一回総会打合せ会議、六四回生第二回打合せ会議＝中野わらじや、寺島会長ら出席一九名

2・8　同窓会支部長会＝諏訪湖インあるが、寺島会長出席

2・20　六四回生第三回打合せ会議＝原宿ラフォーレ、一八名出席

3・1　本部常任幹事・幹事合同会議＝清陵会館、東京清陵会から四名出席

3・17　東京清陵会だより第一回編集会議＝岩波書店、一〇名出席

3・13　六四回生第四回打合せ会議＝中野わらじや、一六名出席

4・7　東京清陵会だより第二回編集会議＝海の幸、一一名出席

4・12　東京清陵会だより取材＝小口禎三氏宅、三名出席

4・18　六四回生第五回打合せ分科会＝中野わらじや他

4・19　東京清陵会だより取材＝南青山会館、五名出席

4・26　東京清陵会だより女性座談会＝赤坂白紙庵、六名出席

5・23　六四回生第五回打合せ会議＝日興クラブ、二一名出席

5・31　本部常任幹事会・幹事会＝清陵会館、東京清陵会から四名出席

6・6　東京清陵会だより第三回編集会議＝岩波書店、九名出席

6・18　東京清陵会だより取材＝池袋天龍、三名出席

6・21　南信同窓連総会＝乃木坂健保会館、東京清陵会から一名出席

6・22　平成九年度（本部）同窓会定期総会・懇親会＝諏訪シティホテル成田屋、出席者約一五〇名、講演海野光三郎氏（64回）

7・11　六四回生第七回打合せ会議＝三井生命日本橋クラブ、寺島会長ら二〇名出席

7・18　常任幹事会＝南青山会館、一九九六年度会務・決算案、一九九七年度事業計画・予算案等審議、会長など一八名

1996年度収支決算報告（案）

自1996年4月1日　至1997年3月31日　（単位：円）

収入の部 科目	予算額	決算額	支出の部 科目	予算額	決算額
総会会費	2,400,000	2,376,000	総会費用	2,670,000	2,626,293
会員年会費	1,500,000	1,210,600	会議費	300,000	263,267
寄付金	50,000	50,000	諸会費	30,000	24,000
受取利息	80,000	40,455	通信費	700,000	662,433
幹事会費	40,000	40,000	印刷費	150,000	202,693
前期繰越	15,962,791	15,962,791	事務雑費	200,000	161,997
			清陵会だより	700,000	717,142
			パソコン費	300,000	13,596
			予備費	50,000	0
			次期繰越	14,932,791	15,008,425
合計	20,032,791	19,679,846	合計	20,032,791	19,679,846

1997年度収支予算（案）

自1997年4月1日　至1998年3月31日　（単位：円）

収入の部 科目	金額	支出の部 科目	金額
総会会費	2,400,000	総会費用	2,600,000
会員年会費	1,500,000	会議費	300,000
寄付金	50,000	諸会費	30,000
受取利息	40,000	通信費	700,000
幹事会費	40,000	印刷費	150,000
前期繰越	15,008,425	事務雑費	200,000
		清陵会だより費	700,000
		パソコン費	100,000
		予備費	50,000
		次期繰越	14,208,425
合計	19,038,425	合計	19,038,425

あとがき

▼世はまさに〝女性の時代〟。母校・清陵でも、最近は入学者の四割は女生徒のようです。清陵に初めて女子が入ったのは昭和二五年（五六回生）、女子第一期生は一四名でした。以来五〇年近く、幾多の俊秀が世に出ましたが彼女たちの声が正面からこの会報に取り上げられたことはない。トップで女性のみの座談会を企画した所以です。

▼東京清陵会はいつ、どのようにして出来たのか。誰か調べてほしい、というご要望を、何人かの方から受けました。その結果が四面のコラムです。改めて思うのは、歴代会長（支部長）、事務局長の手弁当による奉仕活動で支えられてきたのだな、ということです。諸先輩に感謝するとともに、まだ不十分な調査ゆえ、大方のご批判、ご叱正をお待ちしております。

▼前項と矛盾するようですが、提案というかグチを一つ。前記コラムにもあるように、現在の当番幹事制はサラリーマンの定年が五五歳であることを前提に決められたものです。が、政府自ら「定年を六五歳に延長せよ」などと言い出している現在、五五歳はまだまだ会社の仕事に追われているのが実情。やはり六〇歳定年に合わせたシステムにするべきではないか、というのが正直なところです。東京清陵会をここまで育て上げた諸先輩には失礼ですが、是非ともご一考を乞う次第です。

（白川浩司＝六四回）

訃報

謹んで哀悼の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます。（敬称略）

氏名	年次	逝去年月日
花岡　清助	(30回)	1993.12. 4
糸賀　敏明	(43回)	1994. 6. 2
佐野冨士雄	(28回)	1994.10.21
小松　俊彦	(68回)	1994.12. 2
保科　時夫	(31回)	1995. 1.14
百瀬　興二	(38回)	1995. 4.19
春原　俊介	(30回)	1995. 8.19
古田　良雄	(32回)	1995. 8.19
小林　吉作	(24回)	1995. 9.16
小川　三郎	(22回)	1995. 9.20
武井　正邦	(33回)	1995. 9.21
藤原　光明	(43回)	1995. 9.24
林　正治	(41回)	1995.10. 7
矢島　邦彦	(43回)	1995.10.13
小林　亀郎	(34回)	1995.11. 9
吉田　稔	(50回)	1995.11.18
久保　武彦	(34回)	1995.11.25
和田　義夫	(32回)	1995.12.12
矢崎　貞次	(39回)	1996. 1.15
上島　成人	(25回)	1996. 2.29
林　宏一	(51回)	1996. 3.11
岩波　光明	(28回)	1996. 3.17
今井　頼利	(32回)	1996. 4.28
高橋保次郎	(39回)	1996. 6.19
藤森　一	(45回)	1996. 7.26
小嶋　秀壽	(41回)	1996. 8.11
太田　末雄	(29回)	1996. 8.22
小川　利衛	(29回)	1996. 9. 7
杉村　悟	(41回)	1996.10. 7
大滝　義郎	(35回)	1996.10.13
武居　勝造	(40回)	1996.11. 9
和田　和夫	(26回)	1996.11.20
島田　喜仁	(31回)	1996.12.11
青木　新蔵	(32回)	1996.12.11
森　正夫	(57回)	1997. 1.18
宮阪　政武	(31回)	1997. 1.20
鮎沢　久人	(57回)	1997. 3.12
林　千彦	(50回)	1997. 3.18
平出　文久	(61回)	1997. 5. 8
尾澤　達雄	(31回)	1997. 5.16
新田　槙人	(41回)	1997. 6.12

（事務局に連絡が入った方）